

雲南青銅器の動物文様

森 本 和 男

雲南省晋寧石寨山古墓群が発掘されてからほぼ30年ちかくなる。最近では原始古代の雲南地方に関する書籍の出版があいつぎ⁽¹⁾、中国で依然として雲南地方に対する関心の高いことがうかがえる。日本国内でも石寨山古墓群の報告書が近年影印出版され、また、今夏には雲南青銅器の展覧会が東京で開催された⁽²⁾。日中両国で雲南青銅器に熱い視線がそそがれているのである。

雲南青銅器の発掘と研究は解放前にはほとんどおこなわれていなかった。解放後、石寨山古墓群の発掘整理を手はじめに研究が開始され、祥雲県大波那の木榔銅棺墓、江川県李家山古墓、楚雄県万家墳古墓等の発掘調査がおこなわれたのである⁽³⁾。解放後、雲南で出土した青銅器は90数種、7,000点をこえる。そのうち武器の種類と数量がもっとも多く、おもなものには剣、矛、戈、斧、啄、鉞、戚、狼牙棒、箭箠、鏃、弩機、甲冑等がある。生活用具には壺、洗、釜、甑、尊、耳杯、案、盒、貯貝器、傘蓋、枕、鏡、帶鈎、印章等がある。生産工具には鋏、鋤、鎌、鋸、鑿、削、釣針、針、錐、紡織用道具がある。楽器には銅鼓、編鐘、蘆笙がある。その他に大量の装飾品がある。これらの青銅器の分布状況は石寨山、李家山のある雲南省東部の滇池区と雲南省西部の滇西区の2つの地域にわけて論じられている⁽⁴⁾。また、青銅器の年代はすでに紀元前6、7世紀の春秋時代中後期に独自の様相を示し、紀元前2世紀末前漢武帝時に滇池区の青銅器文化が最高度に円熟し、その後鉄器時代へと移行するのである⁽⁵⁾。

雲南青銅器には中国の他の地方にはみられない特異な装飾文様が見られる。特に当時の人々の生活内容を生き生きと描いた文様が有名である。それらの生活場面には祭祀、戦争、狩猟、貢納、上倉、紡織、放牧、飼養、炊飯、演奏、舞踏、結婚等がふくまれ、当時の人々の社会生活の一端をあらわしている。しかし、雲南青銅器の装飾文様には、人物描写の他にかなり多数の動物文様が見ら

れる。動物文様にえがかれる動物には牛、羊、馬、猪、豚、鹿、虎、豹、蛇、猿、狼、犬、狐、狸、熊等の動物をはじめ、鳥、昆虫をもふくまれており、種類にして34種をかぞえる。また想像上の動物、竜や有翼の虎もある⁽⁶⁾。多数ある動物文様のなかには虎や豹が牛、猪、鹿を襲撃したり、相互に咬をまじえたりする、いわゆる動物闘争文もかなりみうけられる。弱肉強食を連想させる動物闘争文は蒙古、南ロシアから北方ユーラシア大陸を西へ、スキタイ系文化につながる文様であり⁽⁷⁾、古くはメソポタミアの古王朝時代に発するものである⁽⁸⁾。ユーラシア大陸一帯にひろがる動物文様と古代中国の動物文様との関係はかなり以前から指摘されていたが⁽⁹⁾、このような見解の背景には、ユーラシア大陸地方の草原地帯を舞台にして展開される青銅器文化の東西交流という雄大なテーマがうかがえるのである。

雲南青銅器の動物文様は甘肅地方の沙井文化の青銅器や匈奴系の綏遠青銅器にもその近縁種がみられ⁽¹⁰⁾、さらに石寨山出土青銅器中に乘馬、騎馬戦をあらわした装飾物があることから、石寨山の青銅器を製作した民族とユーラシア大陸北方草原の騎馬民族との関連性が主張されている⁽¹¹⁾。また、文献考証によってたどると、雲南石寨山の文化を饕蛮→笮些→昆明(西南夷)→羌族→烏孫(昆彌)→匈奴→月氏→大月氏→塞(スキタイ)と結びつけ、ユーラシア大陸北方の遊牧民族と雲南地方の民族との接触交流が想定されている⁽¹²⁾。しかし、石寨山の青銅器に代表される文化はかならずしもユーラシア大陸地方の騎馬民族からのみ文化的影響をうけて成立したわけではなく、周辺の中原地区、川西高原、四川盆地、両広地区、ベトナムのドンソン文化との関係も推測されている⁽¹³⁾。経済的側面からみると、この地域に居住していた当時の人々は牧畜業をさかんに営んでいたが、主要な生業は農業であり⁽¹⁴⁾、古くから牧畜、騎馬を主体とする北方ユーラシアの遊牧民とはいささか様相

を異にする⁽¹⁵⁾。ユーラシア大陸北方の草原地帯を舞台にさかえた動物文様は学術的な言葉として使用するには便利であるが、特定の種族、地域、宗教に帰属されるわけではなく⁽¹⁶⁾、ただ文化的接触をうかがえるのみである。

雲南青銅器をかざる動物のなかでもっともおおくみかける動物は牛である。その次におおいは馬である。一方、北方ユーラシア系の動物文様には鹿、羊、馬がおおく、牛は登場しない。古代雲南地方では、牛はきわめて重要な意義をもっていたのであろう。ここで、雲南青銅器を装飾する動物たちのうち牛と馬をとりあげて若干の考察をこころみたい。

牛

石寨山出土青銅器等にみられる牛の特徴は背に肩峰があり、角がながく、胸垂が大きいという点であろう。この牛を「瘤牛」Zebuとする説があるが⁽¹⁷⁾、雲南青銅器の牛にみられる肩峰はさほど大きくはなく、また角は長く湾曲しているので、古代雲南の牛は現代のZebu(インド犂牛)*Bos indicus*とはちがう。雲南青銅器の牛は現在の黄牛の華南牛に似ている。しかし、黄牛の角は短かく、しかも湾曲していない。黄牛はふつうの家畜牛*Bos taurus*とは種の異なる*Bos indicus*に属し、インドの犂牛と近縁関係にある⁽¹⁸⁾。インドの犂牛は現在バリ島等でみかけるバンテング*Bos joranius*の馴化された家畜とあって考えられたが⁽¹⁴⁾、今ではまったく否定され⁽²⁰⁾、東南アジア地方には犂牛の家畜化の条件がないと指摘されている⁽²¹⁾。文献上にあらわれる中国南方の「封牛」「犛牛」は肩峰のある牛を指すのみで、「瘤牛」が華南型黄牛か不明である⁽²²⁾。「犛牛」「犛牛」はバンテング牛と近縁のガウル牛*Bos gaurus*とされている⁽²³⁾。インドシナ半島の基部に位置する雲南地方はいろいろな面で東南アジアと太古からの交流があったと想定され、牛の家畜化にも相互の影響があったと思われる。けれども、残念ながら東南アジアにおける牛の家畜化は今のところあまりはっきりしていない⁽²⁴⁾。雲南青銅器にあらわれる牛はすくなくとも原牛(*Bos primigenius*)型とは明らかにちがいが、また、犂牛とは別の東南アジア系の牛との関連性も十分に考えられるのである。

ところで、古代雲南地方の牛は社会的にどのよ

うな役割を荷ったのであろうか。古代雲南地方に牛耕がひろまるのは後漢の初期から中期にかけて2世紀前後に中原から四川を経由して伝わった⁽²⁵⁾。それ以前の雲南の農業は鋤(鋤)の使用を中心とする鋤耕農業の段階であり、犁耕はまだおこなわれていなかった⁽²⁶⁾。雲南青銅器中にも牛耕の表現はまったくない。牛はおもに祭祀の場面に登場する⁽²⁷⁾。「詛盟」に際して犠牲として牛が屠殺される(石寨山M 12 : 26)。祭祀にあたり牛は奴隷と柱にしばられる(季家山M 24 : 90)。「孕育」の祭祀に家屋の柱に牛首をかける(石寨山M 3 : 64, 石寨山 13 : 239, 石寨山M 6 : 22)。古代雲南地方の牛は役牛、耕牛、乳牛ではなく、祭祀等の儀式にもちいられる犠牲であった。

ここで想起されるのは現在アッサム地方に生息するミタン牛*Bos frontalis*の「家畜」としての役割である。ミタン牛は飼育といっても夜間に略奪者の手をのがれるために村落にかえる以外は森林の中を自由に行き来し、犠牲と交換の時だけに必要とされるのである。結婚、葬式、不幸、病氣、豊穰祭等の様々な機会に富を誇示する人々によって牛は屠殺され、またその際には多数の動物も殺されるのである。さらに、ミタン牛は花嫁代価と村落交易用の交換物という役割をも荷っている⁽²⁸⁾。古代雲南地方の牛についても似たような用途が考えられる。牛は単なる役用、食用として飼育されていたのではなく、人々の精神的側面と結びついていた。牛の家畜化を宗教的起源にもとめたハーンの説は今ではあまりかえりみられなくなったが、数多くの問題を提起しており一概に否定することはできない⁽²⁹⁾。牛飼育の宗教的祭祀的研究が今後とも必要であろう。

馬

雲南青銅器中にみられる馬は通常人間の乗用家畜として表現されている。騎士像(石寨山M 10 : 53, 石寨山M 13 : 274, 石寨山M 12 : 155, 石寨山M 6 : 13, 石寨山M 7 : 34)。戦場の騎馬(石寨山M 6 : 1, 石寨山M 13 : 356)。狩猟する騎士(石寨山M 6 : 14)。祭祀に参列する騎士(石寨山M 12 : 26, 石寨山M 20 : 1)。中国に騎兵が登場するのは春秋時代から戦国時代の間である⁽³⁰⁾。春秋時代には戦車戦が主体をなしたが、戦国時代には歩兵戦が主体となり、歩兵戦のなかに騎兵が編成さ

れた⁽³¹⁾。雲南青銅器の戦闘場面にも騎兵と歩兵が剣を交じており、戦車の姿はみえない。乗馬による狩猟は戦国時代にすでに存在していた。伝洛陽金村出土の銅鏡上に剣を手に虎にうちかかろうとする武装した神話伝説的人物がえがかれている⁽³²⁾。

古代雲南地方で馬に乗ることのできた人物は輿に乗る人物(石寨山M1, 石寨山M20:1, 石寨山M12:2)と共に上層階級に属していただろう。馬は貴人の乗物であり、貴人の象徴でもあった。ところで、貴人たちの乗ったこの馬は「果下馬」と呼ばれ、蒙古馬とは別系統の四川、雲南地方にいた小型の馬である⁽³³⁾。騎馬の風習の伝来とともに身近に生息していた野生の小型馬を中国西南地方の人々が家畜化したのであろう。

以上、雲南青銅器の動物文様について二、三気がついた事を記した。いずれにせよ中国西南地方からインドシナ半島の基部にかけては、チベット・ビルマ語族、モン・クメール語族の多数の少数民族が古来から複雑に入り組んだ地域であり⁽³⁴⁾、古代のこの地域の社会、文化状況も謎の部分がおおい。雲南青銅器の家畜動物から解釈すると、牛の飼育をふくむ南方系の稲作文化に北方系の騎馬風習が伝来したといえるだろう。

註

- 1) 汪寧生『雲南考古』雲南人民出版社 昆明 1980 『雲南青銅器論叢』文物出版社 北京 1981 雲南省博物館『雲南青銅器』文物出版社 北京 1981 『古代銅器學術討論會論文集』文物出版社 北京 1982 方国瑜『雲南史料目錄概説』中華書局 北京 1984
- 2) 『雲南博物館青銅器展』汎亜細亜文化交流センター 1984 龔学孺「青銅器に見る雲南・古代滇国の文化」『人民中国』 1984年8月号
- 3) 雲南省文物工作隊「雲南祥雲大波那木椁銅棺墓清理報告」『考古』 1964年第12期、雲南省博物館「雲南江川李家山古墓群發掘報告」『考古學報』 1975年第2期、雲南省博物館文物工作隊「雲南楚雄東方家壩古墓群發掘簡報」『文物』 1978年第10期
- 4) 雲南博物館「雲南古代文化的發掘与研究」『文物考古工作三十年』文物出版社 北京 1979 p.376
- 5) 汪寧生『雲南考古』雲南人民出版社 昆明 1980 p.32
- 6) 張增祺 孫太初 王大道「雲南青銅器概説」『雲南青銅器』文物出版社 北京 1981 p.207
- 7) Minns, E. H. *Scythians and Greeks*. Cambridge University Press. London, 1913 p. 271~282
- 8) Dittrich, E. *Das Motif des Tierkampfes in der Altchinesischen Kunst*. Harrassowitz. Wiesbaden. 1963 S.58
- 9) Rostovtsev, I. *The Animal Style in South Russia and China*. Princeton University Press. London. 1929 p.83~84, 104~106
- 10) 横田禎昭『中国古代の東西文化交流』雄山閣 1983 p.159~163, 水野清一 江上波夫『内蒙古・長城地帯』東亜考古学会 1935 p.122~136 参照
- 11) Деоник, Д.В. *Всадническая Культура в верховьях Янцзы и Восточный Вариант «Звериного Стиля»*. *Культура и Искусство Народов Средней Азии в Древности и Средневековье*. Наука. Москва. 1979 с.64
- 12) 白鳥芳郎「雲南省寧寧県石寨山發掘遺物の意匠に見られる遊牧民的要素」『上智史学』No18 1973年10月 p.130~131, 白鳥芳郎「石寨山文化に見られるスキタイ系文化の影響」『江上波夫教授古稀記念論集 民族・文化篇』山川出版社 1977 p.211
- 13) 汪寧生「試論石寨山文化」『中国考古学会第一次年会論文集』文物出版社 北京 p.284~289
- 14) 雲南博物館(註4) p.379
- 15) Chard, C.S. *Northeast Asia in Prehistory*, The University of Wisconsin Press. London. 1974 p.163~164 参照
- 16) *The Macmillan Dictionary of Archaeology*. London. 1983 p.22
- 17) 汪寧生(註5) p.70
- 18) 上坂章次『原色家畜家禽図鑑』保育社 1964 p.30
- 19) Keller, C. 『家畜系統史』 1919 加茂儀一 訳 岩波文庫 p.133~134
- 20) Zeuner, F.E. *A History of Domesticated Animals*. Hutchinson. London. 1963 p.255

- 加茂儀一『家畜文化史』法政大学出版 1973
p. 610
- 21) Шнирельман, В.А. *Происхождение Скотоводства*. Наука. Москва. 1980 с.117
- 22) 中国の学者は文献上の「封牛」を現在の「瘤牛」としている。
- 23) 謝成俠「中国牛種の起源と進化」『科技史文集』第4輯 上海科学技術出版社 1980 p.186
- 24) Herre, W and Rohrs, M. *Zoological Considerations on the Origins of Farming and Domestication. Origins of Agriculture*. Mouton Publishers. The Hague. 1977 p.266
- 25) 李昆声「雲南農業考古概述」『農業考古』1981年第1期 p.95
- 26) 王大道「雲南滇池区域青銅時代的金属農業生産工具」『考古』1977年第2期 p.95
- 27) 季昆声「雲南牛耕の起源」『考古』1980年第3期 p.268~269
- 28) Clutton - Brock, J. *Domesticated Animals*. British Museum. London 1981 p.137~138
- 29) Sauer, C.O. 『農業の起源』1952 竹内常行 齊藤晃吉訳 古今書院 p.157~167
- 30) 楊寬『戦国史』第2版上海人民出版社 1980 p.290
- 31) 藍永蔚『春秋時期的歩兵』中華書局 北京 1979 p.10~11, 40
- 32) 楊泓『中国古兵器論叢』文物出版社 北京 1980 p.95
- 33) 林田重幸「日本在来馬の源流」『馬』社会思想社 1974 p.252
- 34) Pulleyblank, E.G. *The chinese and Their Neighbors in Prehistoric and Early Historic Times. The Origins of Chinese Civilization*. Universtiy of California Press. London. 1983 p.416~442 参照

(研究部)

ローム層の層序区分と分析について

鈴木定明

1. はじめに

本県において本格的な先土器時代の調査が実施されるようになってから約14年が経過し、膨大な資料が蓄積されてきていることは周知のことである。また先土器時代はローム層中に遺物、遺構が検出され、他の時代に比べると遺構そのものあるいは遺物そのものから得られる情報は少ないことも認めざるえない。従って、他分野、特に自然科学的分野(註1)にもその情報を求めることが多くなる。中でも遺構、遺物が検出される関東ローム層についての情報は、我々が石器群を文化層として捉える場合の時期決定に重要な役割を果しており、必要不可欠のものである。特に層序区分の確立は重要なことであり、本誌第5号(註2)ですでに橋本氏により提言がなされているが、再度ここで筆者の感じている点について若干の意見を述べるとともにローム層の新しい分析方法について

紹介してみたいと思う。なお本稿で取り上げるのは下総台地を中心として、立川ローム層に限ることを付記しておく。

2. 基本的層序の現状と検討

本格的な先土器時代の調査が昭和45年ごろから開始され、層序区分は遺跡ごとに別々に行なわれていたが、昭和52年の佐倉市星谷津遺跡の調査で、ローム層の基本層序の確立、「始良丹沢パミス」の同定が行われたことの意義は大きい(註3)。これ以降、先土器時代の調査にあたっては、当該層序区分を指標として共通理解のもとに実施してきたが、現在でも基本的には何ら大きな矛盾は生じていないと思われる。

ただ近年の調査例の増加に伴い、星谷津遺跡でIV~V層として捉えていた層がV層(第1黒色帯)の可能性があると。VII層(第2黒色帯)として